＜学会レポート＞

第16回医療の質・安全学会学術集会

2021年11月27日～28日 ZOOM ウエビナー開催

旗手　俊彦（札幌医科大学医療人育成センター）

COVID-19感染拡大前の2019年までは毎回数千人を集めていた本学会は、昨年度に引き続き今年度もZOOMウエビナー開催となった。ただし、演題数は集合形式で開催されていた時期と変わりなく、今回も非常に多くの有意義なセッションが組まれた。その主な内容は、医薬品・医療機器に関する安全対策という具体的なものから、認定病院患者安全推進協議会のこれまでの活動の総括や医療安全管理者ネットワーク会議というナショナルレベルの取り組みまで幅広いものであった。

ところで、今回の統一テーマは、「心でつなぐ安全文化～Cosmetic Complianceとの戦い～」であったが、学術集会のプログラム、特に招待講演は、そのテーマにこの上なくふさわしいものであったので、特にふさわしかった二つの講演を紹介させていただく。一つは、旭山動物園園長の板東元氏による「伝えるのは命　繋ぐのは命」である。板東氏率いる旭山動物園の理念は、どの動物も生きるためのすごい能力を有しており、その能力をいかに来園者に観てもらえるかということである。そのために、飼育動物のありのままの姿を来園者によく伝わるような飼育施設に工夫を凝らしたという。人間が観て面白い動物とそうでない動物のようにあたかも動物の価値に差があるような観せ方は絶対にしてはいけないという言葉は、聴き手に胸に突き刺さる言葉だった。医療者も、所属する医療施設の価値を高める患者とそうでない患者、学会報告に有用な患者とそうでない患者という差別は絶対にしてはいけないであろう。

二つ目は、元警察庁長官金髙雅仁氏による「世界一の治安と警察のコンプライアンス」である。金髙氏は、長らく世界一安全と評された日本の治安が平成11年代前半に悪化したという。その原因は、平成11年に発覚した神奈川県警本部長による部下の覚せい剤もみ消し事件を発端とする警察不祥事の発覚であった。この事件により、神奈川県にとどまらず日本全国で警察に対する国民の信頼が低下し、犯罪捜査に関する情報提供等の国民による警察への協力がすっかり後退してしまったことが、検挙率の低下につながったとする。そしてこの問題を解決するために、国民の信頼を取り戻すための取り組みを全国の警察署単位でグループワークを行い、その結果を組織改善につなげた。その結果、再び犯罪捜査に国民が積極的に協力してくれるようになり、検挙率が上がり、治安が回復したという。金髙氏によれば、見せかけのコンプライアンスは国民に立ちどころに見破られてしまう。医療安全にとっても全く同様のことが当てはまり、患者の協力なくして安全な医療を実践することは不可能であり、患者に協力してもらうだけの信頼を勝ち得るだけの心のこもった医療を日々実践することが安全な医療につながることは疑いの余地がない。

以上のとおり、WEB形式ながらも、今回の学術集会ではこれまでにないほどの有意義な講演を聴く機会に恵まれ、日本の医療安全を確実に一歩進めたと総括できよう。